

はじめに

現代都市に内在する社会的変容，その中でも地域の差異のあり方と「剰余人口」への受け入れが大きな課題となっている。行政は多面的な「地域政策」や「地域再生」を打ち続けている。一方，住民やNPOといったステークホルダーも，何らかのモデルを打ち出し，地域の機能を考えなおしたり，企業も自らのビジネスの理念で地域に関心を寄せたり，これらの勢いに抗する反対運動も同時に存在している。

本書は，こうした都市における多様な変容を包括的に考え直す目的を有し，都市空間を切り口にし，新たな学術的アプローチかつ理論的な示唆を提示したい。さらにそれにとどまらず，実際に起こっている地域変容，新たに開発された地域機能のダイナミックスを，いくつか具体的な事例を取り上げながら，明らかにする目的も有している。すなわち，都市，そして地域が「剰余人口」に対してどのようなスタンスを取るか，その多様性と矛盾も持ったりアリティを認識したうえで，「包容力ある都市」という理論的フレームワークにし，考察してみる。

さて，この「包容力ある都市論」とは何か，以下の図に従って概観しておく。
①縦軸にマクロな経済成長・インフラ開発⇔ミクロな経済・社会開発というスケール，②横軸に社会が求める，ないし社会から求められる支援ないしケア（互助・共助）⇔自立・自助を配置し，Ⅰ～Ⅳがそれぞれのカウンターパートとなっている。

これらの中で，Ⅰはフォーマルな経済の領域であり，現在は持続的に経済成長を支える「新自由主義」というイデオロギ的なツールとみなされることが多い。ここでは，人が自らの経済力で社会の一員となり，最も理想的な地域参

加のあり方となっている。地域変容に関しては、「ジェントリフィケーション」理論もこの領域に位置づけられ、経済成長を都市空間との関係から展開する方法として扱われている。たとえば、ニューヨークやロンドンのジェントリフィケーション過程、N・スミス [2014] などが想起される。

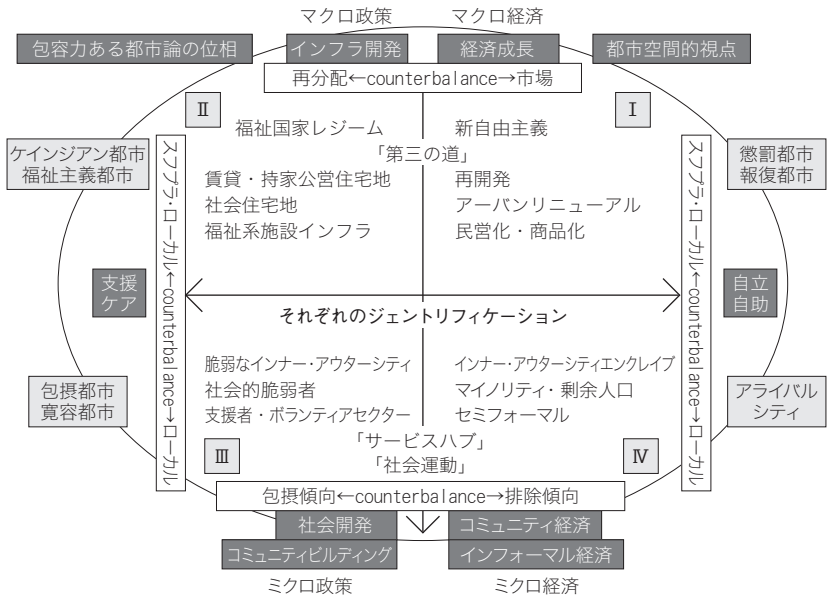
しかし、Iでは「剰余人口」を排除する傾向も顕著である。IIはそのカウンターバランスであり、主に福祉レジームのことを指している。自助のみではなく、互助が重視され、制度化した様式で国家がそれを保護する役割を持つ。都市空間に関しては、大規模な国家主導公営住宅団地などが代表的事例である。たとえば、香港やシンガポールの賃貸公営住宅エステートのような、Castells [1990] のいう集合消費があげられる。かつて耳目を集めた「第三の道」は、これらを結ぶ政治的試みとみなすことができる。

ミクロの次元に着目すると、IIのカウンターバランスであるIIIは、地域がボトムアップに福祉課題に取り組むプロセスを指しており、包摂都市論などが焦点を当てる領域である。たとえば、全 [2016] などがその代表的研究である。

その対称にあるIVは、市場経済の範疇を指すが、ミクロなスケールでの新たなマイノリティービジネスや、ローカルな市場による独自の実践などを含み、たとえばSaunders [2011] などが想起される。このIIIとIVの場合にも、これらの境界を乗り越える勢力があり、例としてオーバーラップする「剰余人口」に対処する「サービスハブ¹⁾」が挙げられる。他にも、たとえばIとIIIを乗り越える「社会的企業」なども位置づけることができる。

では、具体的にどう地域で発現するのか、各章の紹介をしながら、簡潔に触れたい。

第1章は、大阪の最も代表的なサービスハブである西成区北部の歴史的背景から、かつてのソーシャルモビリティの機能(跳ねるベッド)(IV)が停滞した90年代以降、官民双方からの「安楽ベッド」の仕組み(II~III)が誕生した過程が明らかにされ、さらに近年登場した民間による遊休物件の新たな再生事業(AirBnBなど)も検証される(I+IVのライン)。しかし、こうした民間による動きが見出せる一方、従来からのスティグマや偏見の問題で、さらなる資本の投入やそれにとまなうIに相当するジェントリフィケーションの傾向が未だになく、むしろIII+IVによる地域変容が最も著しい。



この種のスティグマがもたらす問題は第2章でも言及され、西成区北西部と同様、過去には移住者の多さに由来する高い流動性という特徴を持った台北市萬華区龍山寺周辺地区の変容プロセスが紹介される。当地域は、戦前からサービスハブの系譜を有し、現在も「剰余人口」のための受け皿であり、様々な地域団体が支援を行ったり、独特な住宅を運営している(Ⅲ+Ⅳのライン)。しかし同時に、資本の流入が全く見られず、整序的な開発が進まず、劣悪な住環境という課題も残されている。こうした地域性の中で、社会住宅事業(Ⅱ)が開始されているが、依然生活弱者には届いていない。

第3章は、韓国・ソウル市の事例であり、最後のセーフティネットの役割(Ⅲ)を果たしている「チョッパン地域」が取り上げられる。こうした地域は、ホームレス問題、そしてホームレス支援と密接に関連しているが、行政(Ⅱ)が後方から支援を行っている一方、Ⅲの領域での再開発も政策的に重視されるようになり、矛盾が生じている実態がある。

第4章のシンガポールの場合、従来ほとんどがⅠとⅡの領域に位置づけられていたが、近年は、市民社会の勢いが加速化しており、エスニック地域で

あるリトルインディアとゲイランにおいて外国人労働者のためのサービスハブ(Ⅲ)が形成されつつあり、独自の狭小部屋住宅市場(Ⅳ)も存在していることが明らかになっている。

第5章は、インナーシティから離れ、パリのアウトターシティにある貧困集中地区の現状が議論されている。とりわけ、フランスにおける国家主導都市計画(Ⅱ)とその限界が指摘され、ジェントリフィケーション(Ⅰ)の脅威がある中で、社会的企業の動き(Ⅰ&Ⅲのライン)がオルタナティブな「参加型都市計画」に至った点が着目される。

第6章のロンドン・ブリクストン地域でも、かつて福祉国家(Ⅱ)とローカルな経済(Ⅳ)が地域の中で強い存在感を示していたが、潜在的なサービスハブ(Ⅲ)がロンドンで展開するジェントリフィケーションに対するバッファー機能を果たすようになってきている。

最後の第7章は、大阪に戻り、生野区の在日コリアン集住地区の背景とニューカマーの現状が検討されている。ここは、強いローカルな経済基盤が存在し、独自に土地取得と密接に関係している。しかし、当地域も自助的な社会的上昇(Ⅲ・Ⅳ)の基盤が次第に弱まるとともに、大資本(Ⅰ)の流入は乏しい。ただし、ニューカマーの居住・就業にからんで、新たな包摂の萌芽がみられる点も指摘されている。

本書は、若者たちの所属する都市研究プラザが全国共同利用・共同研究機関として公募した研究、福本拓(代表)「欧米大都市におけるインナーシティ／アウトターシティをめぐる社会的公正の比較研究」に基づく研究会の最初の成果物である。研究会結成の背景に、欧州都市を襲った連続するテロ事件に接したこと、そこでは凶行に走った人々の活動拠点として特定のエリアがあげられ、それらが我々の研究アプローチに深く関わるエリアであり、従前の我々の研究の枠組み自体を問い直す必要のあったことがあげられる。包摂都市と称した、日本および東アジアの最後のセーフティネットである「安楽ベッド」的仕組み作りに加えて、欧州都市の厳しい現実を目の前にし、研究枠組みの更新に向け欧州展開を図ったのが本書となる。

議論を始めた時に衝撃的であったのは、研究の出発点となった大阪市西成区の、第1章の2頁で描かれた人口ピラミッドの形と、第6章の58頁で描かれ

たロンドン・ブリクストン地区のそれとの違いであった。第7章でも大阪市生野区や中央区の人口ピラミッドが75頁で描かれている。同じセーフティネットシティを構成する代表的な地域でありながら、「跳ねるベッド」的な活力がみられ、不安定要素の温床ともみられるようなアンビバレントな状況を、我々はキャッチしたい衝動にかられたのである。

そのために、ブリュッセルのモレンバーク地区へのメディアの注目も背景に、ベルギーからの研究者を複数招へいする形で、水内俊雄(代表)「東アジアの広義のホームレス支援に基づく包摂型都市生成と支援の地理学の構築」(科研, 基盤研究A)を使用して、昨秋、国際シンポジウム「復元力(レジリエンス)のある都市をめざして——アジアと欧州を架橋する先端的都市論」でのメインセッション、および分科会「都市空間再編下のしたたかなまち再成」を企画した。

これは、都市空間の変容が押しなべて「ジェントリフィケーション」と扱われることに対し、福祉制度などのローカルなコンテキストを強く意識し、変容の多様性を重視した概念の探究であり、「ジェントリフィケーション」に対する新たなアプローチの試みでもあった。本書はその成果の第一弾として読者にお届けするものでもある。

- 1) 「サービスハブ」は、剰余人口に対する(NPOなどによる)支援が集中している地域を意味している [DeVerteuil 2015]。

▼参考文献

- 全泓奎 2016『包摂都市を構想する：東アジアにおける実践』法律文化社
スミス, N. (原口剛訳) 2014『ジェントリフィケーションと報復都市』ミネルヴァ書房
Castells, M., Goh, L., Kwok, Y.W. 1990 *The Shek Kip Mei Syndrome: Economic Development and Public Housing in Hong Kong and Singapore*. Pion.
De Verteuil, G. 2015 *Resilience in the Post-welfare Inner City: Voluntary Sector Geographies in London, Los Angeles and Sydney*, Routledge.
Saunders, D. 2011 *Arrival City: The Final Migration and Our Next World*, Vintage Books.

2017年1月

コルナトウスキ・ヒェラルド
水内 俊雄